

森信三と丸山敏雄

—共通の恩師と「いのち〜宇宙」をめぐって—

丸山敏秋

己がいのち照り透らせるものの前にこころ度ましくしましありけり（森信三の歌、「照徹」より）
個に居りて個にとどまらず天地にみちみなぎれる我が命はや（丸山敏雄の歌、「いのち」より）

はじめに

1976年に社団法人「実践人の家」を設立した森信三（本名は「のぶぞう」、通称は「しんぞう」）は、哲学者であり教育者として名高い。その森と、1947年に社団法人倫理研究所を創立した丸山敏雄（以下「敏雄」とも呼ぶ）とは、学年は違うが、一時期は広島高等師範学校に籍を置き、共通の恩師から甚大な影響を受けた。二人は同じ学生寮にいたことから面識はあったかもしれないが、卒業後に交流はない。しかし二人とも独自の社会教化活動を興したことで共通している。ただし森の享年は96、敏雄は59と37年も違う。

2019年8月24日、尼崎市で開催された「実践人の家」全国研修大会で、筆者は早くから講演を依頼され、快諾していた。同団体からの講師依頼は初めてではなく、20年ほど前に東京で開かれた研修会でも務めたことがある。

尼崎市での研修大会で、事前に主催者から強く要望されたテーマが、森信三と丸山敏雄との関わりであった。そこで考えた末、学生時代に親しく教えを受けた恩師を中心に両者の共通点を見つめ、思想的な核心である「全一学」と「全一統体の原理」を中心に内容を構成しようと決めた。丸山敏雄はわが祖父であるから言うまでもないが、筆者は若い頃から森信三の著作を折々に繙いてきた。20代の前半には手書きの月刊「ひとり通信」を出すようになり、それを森に送ると、即座にハガキの返事を頂戴するという関係を続けた時期（約2年間）もあった。ちなみに、当時の森は脳溢血の療養中で、ハガキの最後にはかならず「マヒの右手もて」と書かれていた。

講演のために久しぶりに『森信三全集』続編全8巻（以下『森全集』と略記）を手にしたが、改めてそこに収録されている学術論文の難解さに肝を冷やした。理性により合理的に解釈しようとすると、森の「全一学」も敏雄の「全一統体の原理」もどんどん遠ざかっていくように感じられ、文字面の解釈ではその真義を捉えられないとの思いに駆られる。どうしてか。

おそらくそれは森と敏雄の人生が、常人には及びがたい体験や真摯な実践（あるいは修行）に裏付けられていて、ただ文章を読んだだけの理解では汲み取れないものが多々あるからであろう。気軽に講演を引き受けたことを悔いもしたが、聞き手になにがしか有意義な情報を与えられるだけでもよしと開き直り、当日を迎えた。そしてまたここでも、改めて多少の思索を加え、論文の執筆にとりかかったのである。

両者の思想を比較する上で今回は、「いのち」「コスモス(宇宙)」をキーワードとした。大宇宙というマクロコスモスと、人間のような小さな宇宙であるミクロコスモスが、互いに照らし合うという考え方は、洋の東西を問わずはるか昔から存在してきた。森も敏雄もそのことを力説しているので、二人に

共通した考え方の典型と言い得ると思う。

なお、丸山敏雄について筆者はこれまで種々の角度から書いてきたこともあり、今回は森信三の人物や思想の方を分量としては多く採り上げることを断っておく。